

2018 年度 論文受賞論文および授賞理由

優秀物語発掘論文賞

沼田あや子

「発達障害児の母親の語りのなかに見る家族をつなぐ実践－「葛藤の物語」から「しなやかな実践の物語」へ」第 15 号(2016), 142-158.

発達障害児の母親支援においては、支援者が母親の日常生活に配慮することが欠かせない。本論文は、発達障害児の母親にインタビューを行い、母親が語る子と父親（夫）と暮らす日常生活のエピソードに着目し、母親が家族との関わりのなかでどのように生きているかを描き出すことを試みた。従来の障害児の母親のストレス研究が問題発見・解決型の研究とすると、母親の日常生活の意味世界に寄り添う本論文は物語発掘型の研究と言えよう。母親の語りを M-GTA を用いて分析した結果、母親が家族というフィールドにおいて主体的に子や父親と関わり、日々の課題についても自ら考え乗り切ろうとしている様相が明らかになった。従来の研究では障害児の母親は葛藤をもっているという前提で実施されていたが、本論文は、母親が平穏な日々を願いながら家族をつないでゆく「しなやかな実践の物語」を発掘した。発達障害児の母親の支援という実践上も意味のある論文と考えられる。以上から、選考委員会では、本論文を優秀物語発掘論文賞にふさわしいという結論に至った。

会は本論文が優秀着眼論文賞にふさわしいという結論にいたった。

優秀ビデオエスノグラフィ論文賞

堀田裕子

「残されるモノの意味－線条体黒質変性症患者とその介護者の事例より」第 16 号
(2017) ,63-78

本論文は、きわめて進行の早い難病である「線条体黒質変性症」患者の在宅療養において、病気の進行によって使えなくなったリモコンなどのモノが、そのままそこに残されているという、一見非合理的な生活環境について、ビデオエスノグラフィの手法を通して考察し、それが病気の進行に抗う「素人実践の有能さ」の現れであることを、エスノメソドロロジーの着眼点とメルロ＝ポンティの身体論とを組み合わせることによって、説得的に示している。すなわち著者は「推論の域をでないかもしれない」と断りながらも、まだ病状が進んでいない時に、一度身体化された手足の延長としてのリモコンなどの道具の配置と使用こそ、かつてリモコンが使用できた過去の生活環境を呼び起こし、その結果、新たな身体化を次々と要求する進行性の難病に抵抗する素人の実践であると主張する。かつて病者の身体の一部であった道具を、「残されるモノ」として、介助者がそれを使い続けるという身体的実践によって、在宅療養の記憶である「垂直に積み重なる時間」が空間的に維持されていくのである。ここに、病気に振り回される当事者の負担感を軽減する可能性を読み取るのは、けだし慧眼である。

優秀着眼論文賞

古市直樹

「小集団学習中にジョイント・アテンションはどのように機能しているかー中学校社会科の授業場面を事例として」第 16 号（2017）, 174-190.

小集団学習における共同行為を分析するにあたっては、複数の参加者の発話・身振り・空間・物を関連づけて分析することが重要であると考えられる。本研究は、このためにジョイント・アテンションの概念を導入し、中学校社会科の小集団学習の事例において、ジョイント・アテンションが果たす機能について分析したものである。授業映像の詳細な分析の結果、ジョイント・アテンションは生徒たちに教材についての思考の相互比較を生成させる機能を持つことが示唆された。従来の小集団学習の研究が空間・物との関係を十分扱えなかったことを課題として、ジョイント・アテンションの概念に着眼してこの課題に挑んだ意義は大きいと考えられる。分析結果は学校現場での授業実践に対しても多くの示唆を与えるものであると考えられる。以上から、選考委員会は、本論文が優秀着眼論文賞にふさわしいという結論に至った。論文の読みやすさにはやや難点もあったが、複数の参加者の発話・身振り・空間・物を関連づけることで、分析自体は複雑にならざるを得ない。このことを踏まえると、今後は、図と記述の位置の調整、文章表現などの点でさらなる工夫を重ねることによって、論文がより読みやすくなることを期待したい。